

答え合わせ・解説 No.8

問1	答え 3 合理化	自分の思い通りにならない現実に対して、もっともらしい理由をつけて正当化し、自尊心を保とうとする心の働きを「合理化」と呼ぶ。提示された事例では、不合格という不都合な現実に対し、通学の不便さという理由をつけて自分を納得させようとしている。
問2	答え 2 他者の性格に対する推論とかかわり方	相手の性格を「気難しそう」「気が弱そう」などと主観的に推測（推論）し、その推測に基づいて自分の接し方（かかわり方）を変える心理的プロセスを指す。これに対し、目の前の高齢者に席を譲る行動は、相手の性格を推測した結果ではなく、「お年寄りには席を譲るべきだ」という社会的規範や状況に対する直接的な反応であるため、このプロセスには該当しない。
問3	答え 2 二重結果原則	緩和ケアにおける鎮痛薬投与のように、1つの行為が「苦痛の緩和」という善い結果と「死期の短縮」という悪い結果の双方をもたらす場合、悪い結果が意図されておらず、善い結果がそれを埋め合わせるほど十分に大きいならば許容されるとする。これはトマス・アクィナスの神学に起源を持ち、現代の生命倫理学でも広く議論されている。
問4	答え 4 ケアの倫理	ギリガン（Carol Gilligan）は、コールバーグの道徳発達段階説が男性的な「正義や権利」の基準に偏っていることを批判し、他者とのつながりや配慮、具体的な他者への責任を重視する「ケアの倫理」を提唱した。これは、単なる自己決定や抽象的な義務論とは異なり、他者を支える具体的な関係性やケアの営みを倫理的に評価する視点を提供するものである。
問5	答え 4 アパルトヘイト	アパルトヘイトは、南アフリカ共和国で1948年から法制化された人種隔離政策である。ネルソン・マンデラらの闘争や国際的な批判・制裁を経て1991年に廃止された。制度が廃止された後も、長年の歴史的背景によって形成された居住地域や経済格差などの構造的差別を解消することが現代社会の課題となっている。
問6	答え 1 第二反抗期	青年期には、他者への依存から脱却し、自己の主体性を確立するプロセスとして、親や年長者、社会的権威に反抗する時期が見られる。これは幼児期の第一反抗期に対して、精神的な自立を目指す重要な発達段階として位置づけられている。
問7	答え 4 原型	スイスの心理学者ユングは、個人の経験に基づく「個人的無意識」の奥底に、人類に共通して受け継がれている「集合的（普遍的）無意識」が存在すると提唱した。この集合的無意識の領域で、様々な文化の神話や伝承に共通して現れる普遍的なイメージのパターンのことを「原型（アーキタイプ）」と呼ぶ。これには「太母（グレートマザー）」や「老賢者」などのイメージが含まれる。
問8	答え 3 防衛機制	欲求不満や葛藤による心理的危機から、無意識に自己の精神的安定を維持しようとする心の働きを防衛機制と呼ぶ。オーストリアの精神分析学者フロイトらによって提唱された。これに対し、直面した課題に対して客観的な分析を行い、現実的かつ合理的に解決を図る行動は「合理的解決」に分類され、無意識の防衛機制とは区別される。
問9	答え 2 投射	自分の中にある受け入れがたい感情や欲求を、自分が抱いているのではなく、他人が自分に対して抱いていると思いつく防衛機制を投射（投影）という。これにより、自らの不快な感情を他者に転嫁して心の安定を保とうとする。抑圧された欲求と反対の態度をとる「反動形成」や、欲求を社会的に価値のある活動に置き換える「昇華」など、他の防衛機制との違いを理解しておくことが重要である。